

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。



九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 8 0

2008(平成20)年11月19日(月)発行



アメリカ民主主義の精神を最もよく表現したリンカーン大統領のゲティスバーグの演説

＜145年前の1863年11月19日は、リンカーンのゲティスバーグ演説の日＞
アメリカで奴隷制をめぐる南北戦争(1861～1865)がおきますが、その最大の激戦地のペンシルベニア州ゲティスバーグでの戦没者墓地奉獻式典で、第16代大統領リンカーンが行った演説。リンカーンが自ら考え書いた英語の模範的散文で、最後の部分が特に有名な「人民の人民による人民のための政治」です。ところがその民主主義を見事に表現した名文はそっくり、『日本国憲法』前文の「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであって、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する」の部分にしっかり受け継がれています。



延 齡 草

原町区上町 八牧美喜子

土公蔵 宮城の山奥で終戦

昭和二十年八月、敗戦を知ったのは宮城県の山奥、笹谷峠の村、私は満十六歳、同僚の友は勤労奉仕に通学していたが、病弱の私は祖母と仙台東空襲に焼け出された幼い従弟達と疎開して一カ月目だった。

辱めを受ける時の「死」を覚悟

敗戦を聞き、祖母、従弟はいいが私はまもなく死ななければならぬ。敵兵が占領に来れば娘達は辱めを受けるかも知れない、その前に死のうと思つた。裏の河原に行くも夏の日は燦々と照り、川水はいつものごとく流れる、この変わりない風景のなかで私は消えてゆかなければならぬ。

それは戦時中に感じた「死」と一変していた。戦時の死はみな一緒であり、国難に殉ずるといふ意義が私達にもあり無意味ではなかった。しかしいま戦に敗れ、誰のためにもならない死がくるのは虚しく淋しく、涙がとめどなく流れた。
川の色、蟬の声とともに忘れられない思い出である。

昭和一行は不償の世代

占領は順調に進み、私が死ななければならぬ事態はなくなつたが、それからの月日は、私達戦中派にとつて怒濤のごとき日々だった。今まで教えられたことはすべて偽りと報じられ、否定と非難と暴露を黙って聞く他なかつた。昭和一行は不信の世代と言われているのは当然で、私は今も現在が「あれは嘘でした」ということが起こるかかも知れないと心に思いつつ生きています。

戦争の時代を懸命に生き 死んだ人々を、否定や非難は許されない

そして、いくらあの時代を否定されても、あの時代を信じ懸命に生きて死んだ人を否定、非難することは許されないと思っている。



私は長い間、亡き方のお手紙を桐の手箱に納めて筆箱に秘めていた。それは原町飛行場で厳しい訓練に明け暮れていた若い飛行兵から私に送られたものだった。
昭和十九年秋、彼等は決戦に馳せ参じる決意で気負い立っていた。涙ながらに見送る私達に、或る人は淡々と、或る人は人間的苦悩をみせて別れて行ったが、どの人も自分達が亡き後も新聞、映画に戦果をたたえられて、いつまでも人々の胸に生き続けると信じて征つた。しかし……(八牧美喜子著『いのち』まえがきより)

▲原町飛行場の特攻隊員の手紙と八牧さんの日記をまとめ、1996(平成8)年8月に出版された『いのち』。特攻の死を覚悟した若者たちの壮絶な真情が綴られている。

生く限り秘む文古び鳥雲に 美喜子
昭和四十三年作。戦時中のことはすべて悪だったと十把一からげに断じられた世相がやっと正され始めた頃、テレビに特攻隊員が主役のドラマが放映され私は涙してこの句を作った。
私の育った町(宮南相馬市原町区)には戦時、陸軍航空隊があり、町の人々と軍人との交流があつた。食料の不足のときも御馳走をつくりもてなし、親交を重ねていた。昭和十九年夏、戦況は悪化、航空兵は次々と戦場へ発ち、秋には特攻隊員も征くようになつた。私宅に遊びに来た人々にも命令が来た。(裏面へ)



原町飛行場を窺つ特攻隊員



原町飛行場

▶戦時中の原町飛行場の様子。ここで数百人が厳しい訓練をうけ、やがては特攻隊員として出撃する人も多くなった。(「いのち」より)

(前面より)
死を覚悟した特攻隊員から
何十通もの手紙をいただいた

この健やかな若者も間もなく死ぬ、この人が永久に私の前から消える。少女の私は悪夢のなかにいる気持で言葉もなかった。征く彼らも「お世話になりました」と敬礼をし、飛行機の翼を振って別れを惜しみ再び還ることがなかった。そして、その人達を書いた手紙や寄せ書きなどが私の手に何十通も残った。

「美喜ちゃん、必ず勝つから心配しないで」とこの人々は言った。子供や私達を守るために生命を捨てるのだとも言った。信念はそうであろうと人間としての心の揺れを私は感じた。望んで死ぬのではないその人々を、せめて忘れないでおこうと心に誓って返事を書いた。

「明細特攻隊で出撃します」

特攻基地知覧の消印のある手紙で、「明朝出撃します。月は冴え原町を思い出しますが一切の情を排して征きます」と死の何時間か前の手紙をくれた中田茂さん。しかし、この方も別の手紙にこんな歌を書いている。

月光に照らし出されし瀬戸の海
あの島かげにわれも住みたし

比島で特攻戦死の久木元延秀さんは、石垣島から「菫宮のやうに美しい」「八時に消灯され来し方を考えて若干淋しくない事もない」との人間の真情と次の歌を残された。

今宵いかにと吾れ恋ひやまぬ



久木元延秀少尉

▶愛機と久木元延秀少尉
フライビンで戦死されました。

「平凡に暮らしたかった」

民間パイロットだった「巴里祭」の曲の好きな井上清さんは、「銀行員になり子供を作って平凡に暮らしてみたかった」と私に漏らした。

沖縄で戦死の川口弘太郎さんは「郡上のナア八幡出てゆくときは雨も降らぬに袖しぼる」という歌詞の郡上節をいつも唄った。



川口弘太郎少尉

▶いつも郡上節を唄っていた
川口弘太郎少尉。沖縄で戦死。



挿絵のあった『いのち』の伯父野中淳一

あの人達の生身の思いを伝える手紙を失ってはいけない。持っているだけで罰せられると噂があったが、この遺筆は守り通すと決意した。その手紙はいまも私の手許にしかとある。

それからの長い間、「特攻」は粗暴・愚者の代名詞のように言われ続けたが、私には愛しい人々であった。

終戦から五十年、特攻隊員の手紙と日記をまとめて出版

平成八年、この人々の手紙と、当時私が書いていた幼い日記をまとめ、『いのち』という本を白帝社から世に出すことが出来た。名も伝わらず、思いも埋もれた人の息吹をいくらかこの世に残すことが出来て、私は重荷を下ろした。

戦死に終る日記を写す花の冷え
昭和史に一書を加へぬ難しとど

万世特攻基地跡
冬空に襟像のごと特攻碑

知覧特攻基地跡
サングラス特攻の地を喪の色に
三角兵舎あとに真白の延齡草

(はらまち九条の会) 会員

総合俳句誌『俳壇』二〇〇五年
九月号・本阿弥善作発行より転載

- 八牧さんは、特攻隊の基地だった鹿児島県知覧(ちらん)町の「三角兵舎」の跡を訪ねた時、一面に真っ白な延齡草(えんれいそう)が咲いていて大変感動され、この題名にされたということです。
- 『私の戦争体験』も22回となりました。感想あるいは原稿(400字原稿用紙4枚以内)をお寄せください。



延齡草(6月に開花)